

## 第五章 光る源氏の物語 玉鬘、源氏の四十の賀を祝う

[第一段 玉鬘、源氏に若菜を献ず]

\*年も返りぬ(年が改まりました)。 \*注に<源氏四十歳となる。紫の上三十二、女三の宮十四、五歳。>とある。序でに、朱雀院 43 歳、今上帝 22 歳、春宮 14 歳。

朱雀院には、姫宮、六条院に移ろひたまはむ御いそぎをしたまふ(朱雀院では姫宮が六条院にお移り為さる嫁入準備を為さいます)。聞こえたまへる人びと、いと口惜しく思し嘆く(結婚の申し込みをなされた他の人々はとても残念に思い嘆かれます)。\*内裏にも御心ばへありて、聞こえたまひけるほどに、かかる御定めを聞こし召して、思し止まりにけり(帝もご意向があつて申し入れなさつていらしたが、この決定をお聞きあそばして思い止まりなさいました)。 \*「内裏にも御心ばへありて」は注に<冷泉帝も女三の宮の入内を希望していた、という。初めて語られる。>とある。確かに意外だ。姫宮には入内が最も望ましいとは源氏殿自身が言っていた。しかし朝廷の台所事情を知る朱雀院と六条院ならではの配慮で、姫宮の入内を避けた、のだろうと私は思っていたが、是では朱雀院が帝を今一頼り無く思い、その気持ちに六条院が応えた、という図式になってしまう。私には理解出来ない。仮に朝廷に台所事情があつたとしても、朱雀院は出家して諸行事への参列を辞退するか、招待もされないか、で、その分の予算請求は大幅に減額する筈であり、その減額分を以て姫宮の手当てに当てるとしたら朝廷に遣繰りの手立ては付く筈なので、朝廷の台所事情を考慮して入内を遠慮する、というのも本質的には言い訳に過ぎない、とは私も思っていた。なので、その仮定的前提が、帝が然程は乗り気でない、姫宮が大事にされる見込みが少ない、という事情でなければ、この仮定自体が成立しない。それが此処に来て、実は帝は乗り気だった、と言うのでは、先の「ただ内裏にこそたてまつりたまはめ」(二章八段)は、帝の御内意を前提にした源氏殿の意見だったことになり、その発言の重さは相当違ってくる。一般論の内は、帝自身の意向の問題が残されているが、帝の意向が示されていれば、是はもう一般論ではないので「たてまつりたまはめ」は提案ではなく勧告に近い。それでも朱雀院は六条院を頼り、六条院もそれに応じた、というのでは帝を弟と見て軽んじている、と思うのは私だけではないだろうし、それでも良しとする両院と帝の社会的認識が分からないし、そのまま事態が推移する展開を当時の読者が納得したというのも分からない。

さるは(さて六条院源氏殿は)、今年ぞ四十になりたまひければ(本年で四十歳にお成りなので)、御賀のこと(お祝いの宴席を設けることを)、朝廷にも聞こし召し過ぐさず(帝も聞き捨てなさらず)、世の中の営みにて(公式の祝典が営まれるものと)、かねてより響くを(宮中挙げての評判となっていたが)、ことのわづらひ多くいかめしきことは(仰々しい儀式は)、昔より好みたまはぬ御心にて(昔から好まれない六条院のお考えで)、皆\*かへさひ申したまふ(全て御辞退申しなさいます)。 \*「かへさひまうす」は「返さひ申す」と表記され<御辞退申し上げる>と古語辞典に説明がある。が、手元の辞書には「かへさふ」という項目の説明は無い。多分、「かへさふ」は「返す(断る)」に反復の助動詞「ふ」が付いたものだろうから、「皆」を受けた<次々と>という意味と、「かへさふ」という語自体の持つ語感の<断り続ける=固辞する>という複意かも知れない。「かへさふ」という語には馴染みがないし、現代語にどう繋がるのかは分からないが、反復の助動詞「ふ」の持つ連続性の語感は何となく分かる気がする。今すぐには思いつかないが、多分、現代語にもこの語用を持つ語はあるだろう。

\*正月二十三日、子の日なるに、\*左大将殿の北の方、若菜参りたまふ(春の七草を六条殿の長寿記念に献上なさいます)。 \*注に<『河海抄』は、延長二年正月二十五日甲子、宇多法皇が醍醐天皇の四十賀のために、若菜を献じた例を引く。正月の子日に小松を引いたり若菜を摘んで食べたりして、長寿を祈念した。>とある。「甲子(きのえね)」は干支六十進数の一番目ということで、特に限りが良い。「子の日」は十二支で数える一番目。願掛けには正に縁起が良い。ただ、「子の日」が五行(ごぎょう、中国古代元素の木・火・土・金・水)の十干(じっかん、各元素の兄弟資質)で取れる組み合わせは「きのえ(木の兄・甲)」「ひのえ(火の兄・丙)」「つちのえ(土の兄・戊)」「かのと(金の弟・辛)」「みずのえ(水の兄・壬)」の五種類となるので、正月の「子の日」が必ず「甲子」になる訳ではない。 \*「左大将殿の北の方」は注に<鬚黒左大将の北の方、すなわち玉鬘。『完訳』は「鬚黒の北の方に収まり、もはや源氏とは無関係とする呼称」と注す。>とある。鬘自体に馴染みがない所為か、私には「玉鬘」の呼称から想起される人物像が無い。今でも私には、この北の方は「夕顔の撫子」であり「対の姫」であり「山吹の藤原姫」だ。そして、左大将殿(当時は右大将)と結婚した「尚侍の君」と認識しており、此处で「左大将殿の北の方」とあることに順当な呼称法かと受け止める。強いて言えば、藤原右家右大将が左大将に変わる説明が無かったことが不満なだけだ。因みに、藤原左大将 36 歳、北の方 26 歳。

かねてけしきも漏らしたまはで(あらかじめそういう様子を少しもお見せにならずに)、いといたく忍びて思しうけたりければ(ごくごく密かに用意なさっていらしたので)、にはかにて(六条殿にとっては行き成りのことで)、え\*いさめ返しきこえたまはず(その御訪問の出発を止めてまでお断り申し為されません)。 \*「いさむ」は「勇む(張り切る)」「慰む(慰める)」「禁む(制止する)」「諫む(戒める)」と幅がある。で、「いさむ」の語幹は「いさ」だが、「いさ」はくさあ>と気合を入れて物事に対処する語感なので、その姿勢を意識的にとる意味の意志の助詞「む」が付いた語が原義なのかも知れない。此处では、北の方一行が「いさ」と出発するのを、六条院が「禁む」という掛詞と読んでおく。

忍びたれど(内々の格式張らない御訪問だが)、さばかりの御勢ひなれば(さすがに大将家の権勢なので)、渡りたまふ御儀式など(六条院にお出掛けなさる北の方ご一行の御編成は)、いと響きことなり(とても大勢の従者で賑やかさは格別です)。

\*南の御殿の西の放出に御座よそふ(六条殿のお許しを得て北の方は、春の町の寝殿の南面の西半分の廂間を母屋と一続きに開け放った祝賀場に殿の御席を設けるについて、)。 \*注に<六条院南の御殿の寝殿の西面の母屋と廂間を一続きにした所。>とある。「南の御殿(みなみのおとど)」は<六条院春の町の寝殿南面>。「西の放出(にしのはなちいで)」は<寝殿母屋の西半分を南面に開け放って、その南廂を母屋同様の格式で飾り立てた式場>。「御座(おまし)」は<六条殿のお席>。「よそふ」は<準備する>だろうが、主語は分かり難いものの、どうやら北の方らしい。しかし、主語が北の方でも、まして殿でも、敬語が無いのは変だ。で、「よそふ」は終止形だが、是は下の「いときよらにせさせたまへり」までの一文を文意とする中での設定提示を示す終止形で、話者の息遣いとして一呼吸間を置いたという言い方らしく、構文としては此处で句点は打たず読点とし、意味は連体形の「よそふ」に格助詞「に」が付いたように取りたい。さて、主語は「北の方」だろうという点だが、祝賀は周りが当人を祝う訳で、設営および式進行は大将家北の方が取り仕切る、ということではあるらしい。にしても、場所は祝賀当人の邸である六条院であり、北の方は六条殿に場所の提供を先ず以て求めなければならない。それも、何処でも良いから場所を貸してくれ、というのではなく、北の方は予め場所を想定して事物の準備をしているはずなので、場所指定して使用許可を得る、という運びの筈だ。となれば、急な話とは言え、其処までの事前了解を取り付けた上で、北の方は六条院を訪問したのであり、六条殿もそれなりの心積もりをして待ち受けた、という事情を読者は常識として持っていなければならないらしい。ということは、「渡りたまふ御儀式など、いと響きことなり」に

其処までの含みを読み、ということだろうか。私にはそうした事前連絡の経緯を実感する能力はないので、詳しい経過記述を作者に求めたいが、如何ともし難く、せめて主語を補語する。

屏風(びやうぶ)、壁代(かべしろ、垂幕)よりはじめ、新しく払ひしつらはれたり(殿の御席の周りは、新しく飾り直されました)。うるはしく\*倚子などは立てず(院の格式の椅子様式などは取らず)、\*御地敷四十枚(おんぢしきしじふまい、御席に織物を四十枚敷いて)、御茵(おんしとね、御座布団)、脇息など(肘掛など)、すべてその(すべての殿の御座席の)御具ども(おんぐども、祝いの品々は)、\*いときよらにせさせたまへり(とても美しく仕上げさせ為さっていらっしやいました)。\*「椅子」は注に<椅子を用いるのは中国式、また天皇が用いる。>とある。\*御地敷、莫藎の一種。四十賀にちなむ数を用意する。と注にある。\*「いときよらにせさせたまへり」は注に<「させ」使役の助動詞、「たまへ」尊敬の補助動詞、「り」完了の助動詞、存続。主語は玉鬘。>とある。

螺鈿の御厨子二具に(らでんのみづしふたよろひに、螺鈿細工の二台一組の揃柄仕立ての物置漆器に)、御衣笥四つ据ゑて(おんころもばこよつすゑて、御衣装箱を四つ乗せて)、夏冬の御装束(殿の夏冬の御衣装や)、香壺(かうご、香入れ)、薬の笥(くすりのはこ)、御硯(おんすずり)、\*冴坏(ゆするつき、洗髪水入れ)、搔上の笥(かかげのはこ、櫛入れ)などやうのもの(などのようなものは)、うちうちきよらを尽くしたまへり(派手では無いが丁寧で上質を極めていらっしやいました)。\*御插頭の台には(髪留めの本体には)、沈、紫檀を作り(ちん、したんをつくり、沈木や紫檀を用いて)、めづらしきあやめを尽くし(珍しい模様を凝ってあり)、同じき金をも(同様に飾りの金属にも)、色使ひなしたる(幾つかの色遣いに)、心ばへあり(工夫があつて)、今めかし(新しい)。\*「冴坏」は<米のとき汁を入れて洗髪に使った水入れ>と辞書に説明があるが、「風俗博物館」サイトの「調度品」ページに写真と解説があつて助かる。\*「御插頭の台(おんかざしのだい)」とは何か。「挿頭(かざし、挿頭)」は<上代、草木の花や枝などを髪に挿した事。また、挿した花や枝。平安時代以後は、冠に挿すことにもいい、多く造花を用いた。幸いを願う呪術的行為が、のち飾りになったものという。>と大辞泉にある。ざつと、髪飾り、簪、髪挿し、だろうか。「かんざし」は髻に挿す冠留めでもある。が、冠留めは箸のような長い棒状だ。是は、源氏殿の実用品というよりは宝飾品の類と考えるべきなのだろうか。であれば、宝飾品の台は台座、即ち本体であり、その上に金・銀・パールがプレゼントされるものかと、私のような古い者は60年代のライオン油脂のブルーダイヤを懐かしく思う。いや、此処は「金(かね)」とあるから真珠は付いていなかったかも知れないが。

\*尚侍の君(尚侍である北の方は)、もののみやび深く(物事に於ける雅な感性が深く)、かどめきたまへる人にて(才気を見せなざる人なので)、目馴れぬさまにしなしたまへる(目新しい形に作らせなされた品々の)、おほかたのことをば(全体の印象は)、ことさらにことごとしからぬほどなり(特に奇をてらったものではありませんでした)。\*「かんのきみ」とある。左大将の北の方は今なお現役の内侍所長官であるらしい。就任したのは三年前の十月だった。その参内直前の九月だろうか、当時は右大将だった藤原右家筆頭者に夜這いを果たされ、尚侍は大将と結婚し、大将の反対で尚侍は参内せず、といって当時は大将家には式部卿宮の娘が北の方として住まわっていて、尚侍は十一月になっても六条院夏の町西の対に居住したまま執務していたという記事が真木柱巻一章三段にあった。しかし、その式部卿宮女が大将と不仲で実家へ戻り、大将は自邸に尚侍を迎える準備を整えた。が、尚侍は直ちに大将家に入るのを嫌い、年が明けてから六条院から御所へ一旦移り住んだ。こうして、やっと参内したが、大将が数日後の正月早々に尚侍を自邸に連れ帰った。そのまま、大将邸で「その年の霜月に、いとをかしき稚児をさへ抱き出でたまへれば、大将も思ふやうにめでたしと、もてかしづきたまふこと限りなし」(真木柱巻五章二段)と尚侍は男児を出産し、更に「公事は(おほやげごとは、尚侍の君

は公務を)、あるべきさまに知りなどしつつ(大将邸で居ながらに取り仕切っていて)、参りたまふことぞ(参内なさることは)、やがてかくてやみぬべかめる(このまま取り止めになる模様です)」(同前)と記されていた。その翌年とは昨年のごとだが、昨年には尚侍が登場する場面は無かった。そして、此処に再登場している。相変わらず御所の女官が尚侍の決裁を受けに大将邸に日参しているとすれば、それこそが大将家の権勢を表している。多くの女官が御所と大将家とを行き来するという光景は、何と賑やかで勢いの在ることか。ベクトルという言葉を使いたいほどエネルギーの移行を感じさせる時代変化だ。大将は尚侍を得て有頂天に違いない。太政大臣藤原殿も実の娘の活躍に鼻高々だ。かくも藤原両家の隆盛を体現するかの尚侍の存在だ。それに引き換え、源氏殿は準上天皇の地位を授かり、位こそ一代限りの王籍に戻り、自身の生活は手厚く保護され、臣下身分を越えたが、心身共に老い、王族代表として王権維持の責任だけは増した立場で、役人が多く付き従う予算執行の政治実務からは離れているので、明らかに隆盛は衰えを見せ始めている。このように長寿祝いをしてもらって尚侍からは慕われているようでも、引いて見れば源氏殿は<都合の良い人>に過ぎない。物語の構成上からも、主人公はある面では必ず狂言回しの役割を担うが、この尚侍に関して、特に大将にとって、源氏殿は如何にも役に立つ人だ。それに、藤原殿に対しても、当初は夕顔相手に源氏殿自身は上手く立ち回っていた心算のようだが、結局は当事者に成り切れない脇役に終わったのであり、独り芝居でしかなかったピエロの役割にさえ見える、という喜劇者ぶりだ。作者の何と恐るべき冷徹な視点か。尤も、豪族間の主導権争いに武力を含む政治駆引きを自ら行使して、国家組織の形成に成功した初代王こそは国家経営の主体者だが、組織拡大が止まった後に、その維持が管理主題となる時点で、その出来上がった国体の組織の集合規模の象徴として侵すべからざる神聖をまとい宗教化する二代目以降の王家にあっては、その世俗を超えた神聖性を守る為に自らは経営の主体性を放棄することで尊厳を保つので、王族は神職と学者文化人以外の生き方は許されない。人類の事象認識が科学技術手法の客観性・普遍性にとって代わられるまで、一部知識層の誠実ではあっても個人特性を限界とする主観性によって緻密に体系化された崇高教示は退屈な日常を色鮮やかに彩る演芸であり娯楽であり陶酔であり救いであり、だからこそその恐怖だった、に違いない。しかし、実際の国家経営は財の移動が無ければ一歩も進まない。そこで王家の政治手法は、実務者に王族を養わせる権限を与えるという、形式上は権威者ながら実態は豪族間の比較優位者に寄生化するという奇妙な統治形態を体現することになる。言ってみれば、王権を政治家に利用させることが王族の存在意義であり、即ち王家は本質的に実力者に利用される存在なのは、逃れ難い原理ではある。それでもしかし、源氏殿は光る華なのだ。

## [第二段 源氏、玉鬘と対面]

人びと参りなどしたまひて(祝賀客の高官たちが来場なさって来たので)、\*御座に出でたまふとて(六条殿が宴会場の御席にお出になるという前に)、尚侍の君に御対面あり(尚侍の北の方と御対面がありました)。 \*「御座に出でたまふとて」は注に<女性は祝賀の宴席に出られないので、その前に、源氏は玉鬘に会う。>とある。尚侍が主催者のように思っていたので、是は意外だった。表向きの仕切り役は大将その人らしい。だとしても、公人でもある尚侍でも同席出来ないのか。やはり私には、当時の身分関係や風習などはさっぱり分からない。

御心のうちには(殿は御心の内には)、いにしへ思し出づることもさまざまなりけむかし(尚侍がこのような立場になる経緯に感慨をお持ちになることもさまざまあったことでしょう)。

いと若くきよらにて(六条院源氏殿はとても若々しくて美しく)、かく御賀などいふことは(このような長寿祝いなどは)、ひが数へにやとおぼゆるさまの(数え間違いではないかと思えるほどの)、なまめかしく(優美で)、人の親げなくおはしますを(養父とも見えなくいらっしゃるのを)、

めづらしくて年月隔てて見たてまつりたまふは(めったに会えずに二年ぶりで御会い申し上げな  
さるのは)、いと恥づかしけれど(立派過ぎて尚侍は気が引けたが)、なほけぎやかなる隔てもな  
くて(殿は今でも改まった余所余所しさも無しに)、御物語聞こえ交はしたまふ(近況などをお話  
し合い為さいます)。

\*幼き君も(尚侍の幼子も)、いとうつくしくてもものしたまふ(とても可愛らしく同席していらっ  
しゃいます)。\*「をさなききみ」は注に<結婚の翌年に誕生、数え年三歳になる。>とある。二年前の十一月生  
まれだ。今は正月だから、正味の所は一歳と二ヶ月だ。

尚侍の君は\*うち続きても(尚侍は年子の弟は)御覽ぜられじとのたまひけるを(まだ殿にご覽  
入れるのは早過ぎるとおっしゃったが)、大将(父親の大將は)、かかるついでにだに御覽ぜさせ  
むとて(こういう機会にこそ御覽に入りたいということで尚侍が連れていらして)、二人同じ  
やうに(二人共に同じように)、\*振分髪の何心なき直衣姿どもにておはす(振分髪の無邪気な平服  
姿でいらっしゃいます)。\*「うち続きて」は<生まれたまふ>が省かれた言い方なのだろう。注には<年子で、  
もう一人生まれている。>とある。長男の出産直後に孕んだとしても、せいぜい3~4ヶ月の月齢だ。が、年が改ま  
ったので数えでは二歳。大将の勢いを感じさせる話題だ。\*「ふりわけがみ」は真ん中分けで肩まで伸ばした髪型ら  
しいが、三ヶ月の乳児がそこまで髪は伸びない。「二人同じやうに」は雰囲気なのだろう。

「過ぐる齡も(重なる年齢も)、みづからの心にはことに思ひとがめられず(自分自身では特に  
気にならず)、ただ昔ながらの若々しきありさまにて(ただ昔ながらの若い気分で)、改むること  
もなきを(変わりもないが)、かかる\*末々のもよほしになむ(こうした孫の儲けには)、\*なまはし  
たなきまで思ひ知らるる折もはべりける(意外な自分の老体振りまで思い知らされる時もあるの  
です)。\*「すゑすゑのもよほし」は<次世代の誕生=孫の出産>。注には<玉鬘は源氏の実子ではないが、養女  
となったので、「末々(孫)」が生まれて、という。>とある。\*「なま」は「なまし」の意の接頭語なのだろう。「な  
まし」は否定の副詞「な」が付いた「増す(成長する)」で<十分に成長しない=未熟な>という語かと思う。「はしたな  
し」は<端数の状態=一定水準未満>で、その客観評価を以て下す人物評価が<みつももない>。しかし、だからと  
いって此処の「なまはしたなし」が<年相応の貫禄がないことを恥じる>という理屈を立てる言い方なのではない。  
「なま」は原義こそ<未熟>だが、慣用上は<思わず、不意に、不用意に>という感覚を表す言い方だ。「はしたなし」  
は原義こそ<立場がない>だが、慣用上の語意は<社会規範から人物を客観評価する意志の表明>であり、自己分  
析であれば<否定的に自己認識する=劣りを自覚している>という言い方だ。なので、「なまはしたなし」は<思わ  
ず自分を振り返ってその老人ぶりに気付いている状態=意外な自分の老体振り>。この文は私自身、この年になっ  
てみると本当に納得出来る内容で、是の語感解釈は実感に基づく言い換え。

中納言の\*いつしかとまうけたなるを(中納言が思いがけず早くに子を儲けたのだが)、ことこ  
としく思ひ隔てて(堅苦しく思つて事を構えてか)、まだ見せずかし(まだ私に見せないんですか  
らね)。\*「いつしかと」は<思いがけなく早く>と古語辞典にある。注には<夕霧が雲居雁と結婚したのは、昨  
年の四月。『完訳』は「子があるとするのは、やや不自然」と注す。約十月間ある。またその間に閏月を想定すれ  
ば、不自然なこともないが、藤典侍(五節の舞姫、惟光の娘)との間の子であろうか。>とある。注でもあやふや  
なのだから、この子は今後の物語でも、少なくとも重要人物としては登場しないのだろう。それにしても、中納言が  
子を儲けた、などという一大事が今まで話題にならず、今後も取り上げられないのかと思うと、この時代の、また

この雲上世界の、生活感や人間関係と、作者の意図の繰返される掴み所の無さの、その意外さに驚くと共に、何ともなしに寂しさを私は感じる。ただし、六条院の此処の発言自体は冗句だ。

\*人よりことに(そこへ行くとあなたは弟とは違って)、\*数へ取りたまひける今日の子の日こそ(こうして孫の顔を見せて下さり私を家族と親しんで長寿を祝って下さった今日の子の日というのですが)、なほうれたけれ(それでもなお気が滅入ります)。しばしは老を忘れてもはべるべきを(中納言のように放つといてくれれば、もう暫くは老いを忘れていられたものを) \*「人よりことに」の「人」は<中納言>。 \*「数へ取る」は<数を数える→年を氣遣って長寿を祝う>でもあるが、此処は<人数に入れる→仲間と認識する→家族と思う>という複意を掛けている。この文は上の「まだ見せずかし」を受けた「人よりことに(それに引き換え)」という比較構文なので、「ことごとしく思ひ隔てて」いる中納言とは違って、あなたは私を<この子供たちの祖父として親しんでくれて祝ってくれる>という言い方、に違いない。そうでないと、下の「憂れたし(心が痛む、気が滅入る)」が冗句ならぬ只の恨み言で、「しばしは老を忘れてもはべるべきを」が笑えないオチになってしまう。

と聞こえたまふ(とお話しなさいます)。

### [第三段 源氏、玉鬘と和歌を唱和]

尚侍の君も、いとよくねびまさり(公務に年季が入ってとても良く物慣れて)、ものものしきけさへ添ひて(重々しさまで加わって)、見るかひあるさましたまへり(見事な奥方ぶりでいらっしやいました)。

「若葉さす野辺の小松を引き連れて、もとの岩根を祈る今日かな」(和歌 34-03)

「小松引き 生ひ先祈る 里帰り」(意識 34-03)

\*注に<玉鬘が源氏を祝う歌。「小松」は玉鬘の子ども、「元の岩根」は源氏をそれぞれさす。「小松」「引き」「岩根」は縁語。みずみずしく生ひ先豊かな「小松」の成長力と永遠不滅の「岩根」にあやかって、源氏のますますの健康と長寿を祈る意。>とある。お手本のように良く纏まった歌、という印象。「若葉さす野辺の小松を引き」は丸々「小松引き」の子の日遊びに掛けた詠み方、らしい。「子の日の小松引き」は、松の苗木を根の付いたまま土から引き抜いて門柱に飾って、その生命力を家に呼び込む、どのように多く説明されているようだ。ざっと今の門松に継がる、とのこと。「小松を引き連れて元の岩根を祈る」は<子供を連れて実家を参る>という言い方に<根引きの松の縁起を加えて父君の末永い長寿を祈る>という思いを込めている。

と(と尚侍は)、せめておとなび聞こえたまふ(あえて母親らしい句をお詠みなさって、)。沈の折敷四つして(沈木の盆皿の四枚に)、御若菜さまばかり参れり(春の七草をかたちばかり盛り差し上げると)、御土器取りたまひて(殿は杯をお受けになって)、

「小松原末の齢に引かれてや、野辺の若菜も年を摘むべき」(和歌 34-04)

「小松引き 老いを忘れて 若菜摘み」(意識 34-04)

\*注に<源氏の返歌。「若葉」「野辺」「小松」「引く」の語句を受けて「小松原」「引かれて」「野辺」「若菜」の語句を用いる。「摘む」「積む」の掛詞。「小松」「摘む」の縁語。小松の生命力にあやかって、私も長寿を保てようと祝う歌。>とある。「小松引き」も「若菜摘み」も正月の子の日の行事ということのようだ。「小松引き」は長寿祈願の縁起担ぎで、「若菜摘み」は薬膳に通じる滋養強壯のための風習で、それぞれを季節の行事にするということは、それらの講談を楽しく華やいだ催しに演出した人々の知恵、なのだろう。こうした娯楽を、その生活感と共に失った現代人、少なくとも私にとって、この喪失感は二度と取り戻せない確信があるだけに、途方も無く途方に暮れる。人類、はともかく、私は別の充実感を得ることが出来るのだろうか。いや結局、生活感は個人の問題で、昔も今も虚無感に生きる者と充実感に生きる者とは、何時でも何処にでも居るんだ。

など聞こえ交はしたまひて(などと詠み交わしなさる内に)、上達部あまた南の廂に着きたまふ(祝客の高官たちが大勢南廂の席にお着きになります)。

\*式部卿宮は、参りにくく思しけれど(参列に気乗りし難くお思いだったが)、御消息ありけるに(ご案内があったのに)、かく\*親しき御仲らひにて(このような義理の親子の間柄で)、心あるやうならむも便なくて(腹に一物在るようなのも具合が悪いので)、日たけてぞ渡りたまへる(荷が高くなってから遅れてお見えになります)。\*「式部卿宮」については、注に<玉鬘主催の源氏四十賀に、紫の上の父式部卿宮は参列しにくく思う。鬘黒大将の北の方であった娘が、鬘黒と玉鬘の結婚によって、離縁されたといういきさつがある。>とある。\*「親しき御仲らひ」は注に<源氏と式部卿宮との間には、源氏の須磨明石流離の前後には一時疎遠になっていたが、その後、源氏は式部卿宮の五十賀を祝う(「少女」巻)など、その関係は繕りがもどつたらしい。>とある。式部卿宮は故藤壺入道宮の兄宮であり、源氏殿が藤壺に憧れた元服前の十二歳未満の子供の時から敬うべき存在であり続け、また美形でもあり、元服後に藤壺と禁忌を犯してからは、恐らく心理的に源氏の負担となる存在であり、それは式部卿宮の所為ではないが、源氏は一人芝居を演じるので疎遠にもなるが、加えて紫の上の実父であってみれば、いよいよ重たい存在となり、逃げたい気持ちと逃げられない立場の狭間で源氏殿も宮も居心地が悪い、という間柄だ。その上の尚侍と大将との結婚で、宮の娘が追い出されたとあつては、この大将主催の祝賀は欠席して、別の祝賀に参列した所で、それなりに多くの人々の理解は得られそうな気もする程だ。実際に、こういう立場の人は何時でも何処でも多くの場面で居そうな気もして、如何にも実相だ。

大将のしたり顔にて(大将が勝者顔で)、かかる御仲らひに(源氏殿の義理の子に当たる間柄なので)、うけばりてものしたまふも(この催事を引き受けて取り仕切りなさるのも)、げに\*心やましげなるわざなめれど(宮にとっては実に不愉快な成り行きだったが)、\*御孫の君たちは(実の孫である二人の大将の息子たちは)、いづ方につけても(叔母の紫の上との縁からも継母の尚侍との縁からも)、おり立ちて雑役したまふ(殊勝に祝客接待の手伝いを為さるについて、)。\*「心やましげなるわざ」は式部卿宮の視点に違いない。この文は宮を主語と取る。\*「御孫の君たち」は注に<源氏の孫の君たち。すなわち鬘黒の前の北の方の子供たち、玉鬘は継母、紫の上は叔母に当たる。>とある。確かに「御(おおん)」は、この場面では六条院の事物言動に対してだけ使われている、と語意の理屈では従うが、この文の文意からして私は<宮の実の孫たち>と言い換えたい。

籠物四十枝(こものよそえだ、枝から下げた菓子かごの四十個)、折櫃物四十(をりびつものよそぢ、料理を入れた折箱四十個と四十賀に数を合わせた供え物を)、中納言をはじめ\*たてまつりて(中納言を最初の役をお願いして)、さるべき限り\*取り続きたまへり(近しい者から順次取り続けて殿に献上なさいます)。\*「奉りて」の主語は誰か。「御孫の君たち」かと思うので、「ぞふやくしたまふ」

を場面設定の終止形と取って、句点とせず読点でこの文に続ける。 \*「取り続きたまへり」は注に<『完訳』は「以下、正式の賀宴の作法。夕霧ら、しかるべき人々が順次献上する」と注す。>とある。

御土器くだり(祝客には杯が下され)、若菜の御羹参る(七草の煮物が馳走されます)。御前には(六条院の御前には)、沈の懸盤四つ(ぢんのかげばんよつ、若菜が沈木の脚付き御膳に賀数の四台と)、御坏ども(おんつきども、お飲み物類が)なつかしく(取り合わせ良く)、今めきたるほどにせられたり(今風に作られてました)。

#### [第四段 管弦の遊び催す]

朱雀院の\*御薬のこと(兄院の朱雀院の御病気が)、なほたひらぎ果てたまはぬにより(今なお全快なさない)、\*楽人などは召さず(六条院は遠慮申されて四十歳の長寿祝いの音楽会に大掛かりな御所の楽隊などは御用命なさらず)、\*御笛など(この御祝賀の演奏者には)、太政大臣の(太政大臣の藤原殿が)、\*その方は整へたまひて(名手たちを揃えなさって)、 \*「くすりのこと」は<「病氣」の忌み詞。>と大辞林にある。理屈では<お薬を服用して療養なさっている事態=ご病状>という言い方だろうか。現代語で「くすりのこと」と言えば<薬自体の効果・効用>の意味になるので分かり難い。 \*「がくにん」は<『集成』は「雅楽寮、楽所、六衛府の官人などで音楽をよくする者をいう」と注す。>と注にある。この場合、専門の楽士というよりは御所の公用楽団のこと、と取る。 \*「御笛など」は「楽人など」に対する引き合いで<楽隊ではない楽士>を指すので、「ふえ」は<管楽器>ではなく<吹奏者>を意味する。そして「おおん」がその奏者を規定する。「御」は敬意の接頭語で、文脈に拠ってさまざまな意味が込められて多用されるので、実は理解するのに相当に厄介な言葉だが、この場面では<御=この御祝賀の為の>に違いない。なので、「御笛など」は<この御祝賀の演奏者たち>だ。 \*「そのかた」は<それに見合う人>で、「それ=六条院の四十賀」に見合う奏者とと言えば<当代切つての名人>に違いない。

「世の中に、この御賀よりまためづらしくきよら尽くすべきことあらじ(この御祝賀よりも御目出度く最高美を極めるに値することはないだろう)」

とのたまひて(と仰って)、すぐれたる\*音の限りを(最上の楽器類を)、かねてより思しもうけたりければ(かねてから選んで用意なさっていたので)、\*忍びやかに御遊びあり(情趣深い御演奏がありました)。 \*「ね」は<楽器>のこと、らしい。 \*「しのびやか」は多分、「忍びやか(ひっそりと)」ではなく「偲びやか(情趣深く)」だ。

とりどりにたてまつる中に(それぞれの楽器演奏を六条院に捧げ参る中で)、和琴は、かの大臣の第一に秘したまひける御琴なり(和琴はその藤原大臣が第一の秘蔵品にしていらした御琴でした)。さるものの上手の(和琴の名手である大臣が)、心をとどめて弾き馴らしたまへる音(気に入って弾き慣れていらっしゃる楽器で)、いと並びなきを(またとない名器なので)、異人は掻きたてにくくしたまへば(余人は遠慮なさるが)、衛門督の固く否ぶるを責めたまへば(藤原家長子の衛門督が固辞するのを源氏殿が催促なさると)、げにいとおもしろく(実にそれは見事に)、をさをさ劣るまじく弾く(父親に劣らずに弾きます)。

「何ごとも、上手の嗣(じゃうずのつぎ、名手の素質は血筋)といひながら(と言うものの)、かくしもえ継がぬわざぞかし(なかなかこうは行かないものだぞ)」と、心にくくあはれに人びと思



す(大したものだと感心に列席者たちはお思いになります)。\*調べに従ひて(曲ごとに)、跡ある手ども(先人から受け継いだ奏法があったり)、定まれる唐土の伝へどもは(出来上がった中国伝来の曲などは)、なかなか尋ね知るべき方あらはなるを(こと細かい注意点があっても、かえって練習方法は分かり易いが)、心にまかせて(その時々に応じて)、ただ掻き合はせたるすが掻きに(ただ流し弾きする和琴の間合いに)、よろづの物の音調へられたるは(全ての楽器の調子がまとめられるのは)、妙におもしろく(何とも興味深く)、あやしきまで響く(独特で高度な合奏の音色でした)。\*「調べに従ひて」の文は注釈にも色々な解釈が有り得るとされているが、此处で述べられていることの具体的な内容は、実は丸で分からない。元々、和琴の菅掻きなるものは、言葉の上では幾つかの説明が以前にもあったが、その楽器自体を知らないのだから音が分かる筈もない。ただ、此处や以前の記述から、雰囲気としては講談の合いの手に入れる三味線みたいな印象は受ける。西洋和音の概念を取り除けば、天然素材の皮や弦や息の振動と木管や金管の絶対増幅音は自然調和していて、演奏の真髄は経験で培われた量と感性に基づく、その時々の間合いだけなのかも知れない。

父大臣は、琴の緒もいと緩に張りて、いたう下して調べ(とても低音に調弦して)、響き多く合はせてぞ掻き鳴らしたまふ(胴鳴りを大きく響かせて掻き鳴らしなさいます)。これは(こちらの御子息は)、いとわららかに昇る音の(とても陽気な高音で)、なつかしく愛敬づきたるを(弾き手が分かり易く華やかなのを)、「いとかうしもは聞こえざりしを(これほど上手とは聞いていなかった)」と、親王たちも驚きたまふ。

\*琴は(きんは、七弦古琴は)、兵部卿宮弾きたまふ。この御琴は(このおんことは)、\*宜陽殿の御物にて(歴代名品館である宜陽殿に納められていた楽器で)、代々に第一の名ありし御琴を(歴代で第一と評価された御琴を)、故院の末つ方(故桐壺院が晩年に)、\*一品宮の好みたまふことにて(朱雀院の妹宮が古琴を好んで演奏なさるということで)、賜はりたまへりけるを(お与えなされたものを)、この折のきよらを尽くしたまはむとするため(この六条院の四十賀に最上の演奏を実現なさいたいという)、大臣の申し賜はりたまへる\*御伝へ伝へを思すに(藤原大臣が申し出て授かりなされた経緯を思いなさんと)、いとあはれに(六条院はとても感慨深く)、昔のことも恋しく思し出でらる(故院や大后や兄院や藤原右家との若い時の行き来のことも懐かしく思い出されなさいます)。\*「きん」は七弦で琴柱を使わずに指盤で音程を得る琵琶の置き弾きみたいな印象。古琴は確か源氏殿が得意だったかと思う。また、弦楽器一般に明石入道が通じていて、明石御方も琵琶の名手だったかと思う。明石入道は桐壺更衣と従姉弟であり、この家系は弦楽器の専門家を祖先としていた可能性がある。それが実相背景なのか、何かを象徴しているのかは私には分からない。\*「ぎやうでんのおんもの」は<宮中の殿舎の一つ。累代の楽器や書籍を保管した殿。>と注にある。一種の宝物殿の名品と見ておく。\*「一品宮」は「いちぼんのみや」と読みがあり、注には<女一の宮、母は弘徽殿大后。初めて見える記事。>とある。ただ、弘徽殿大后腹の内親王は二人との記事は以前にもあったかと思う。なお、「品位(ほんゐ)」は<親王・内親王の与えられた位階>で<一品から四品まであり、無位の者は無品(むほん)とよばれた>と大辞泉に説明がある。「一品(いっぽん)」が最高位とのことだが、この物語では母親妃の実家が王族を世話できる力によって、その親王の身分が決まると説明され、従って源氏殿は無品親王になるので、その惨めさを避けるために故院は源氏殿を臣籍降下させた、と桐壺巻に説明されていた。なので、「一品」が<弘徽殿大后腹>を示すのだろう。で、「宮」が<内親王>のことなのだろうか。親王なら「一品親王」と言うのだろうか。ざっとそう理解して従って置くが、全体に不親切な注だ。\*「御伝へ伝へ」は<皇室に代々第一の御物であったのが桐壺院の女一の宮に伝えられ、それがさらに太政大臣に伝わったということ。>と注にある。また、その「申し賜はりたまへる」のは<太政大臣が女一の宮に願い出て頂戴なされた、

の意。北の方が弘徽殿大后の妹四の宮という縁からであろう。>とも注にある。ただ、今や弘徽殿大后も亡くなっており、「一品宮」自身は六条院の妹筋にも当たるので、必ずしも搦め手でなくとも、太政大臣の品位で正攻法に六条院の祝賀の為と一品宮に「願い出て」も古琴の名器を「授けられた」かも知れない。

親王も(みこも、兵部卿宮も)、酔ひ泣きえとどめたまはず(酔い泣きを抑えられ為されません)。御けしきとりたまひて(宮は六条院が感慨に耽っておいでの胸中を察しなさって)、琴は御前に譲りきこえさせたまふ(古琴は院に譲り申しあそばします)。もののあはれにえ過ぐしたまはで(院は感激のあまりに取り澄ましてはいらっしゃれずに)、めづらしきもの一つばかり弾きたまふに(珍しい古曲を一曲弾きなさると)、ことごとしからねど(大曲ではなかったが)、限りなくおもしろき夜の御遊びなり(非常に情緒深まったこの夜の音楽会なのでした)。

\*唱歌の人びと(伴奏で歌う若者たちが)\*御階に召して(みはしにめして、正面階段下に呼び集められて)、\*すぐれたる声の限り出だして(御目出度い祝い歌を大声で歌い上げると)、\*返り声になる(宴会も最後の盛り上げになります)。\*「唱歌」は「さうが」と読みがある。意味は「しゃうが」に同じで<楽器伴奏にあわせて歌うこと>と古語辞典にある。「人びと」は駆り出される<若者>らしい。\*「御階に召す」は<家の主人が寢殿正面の階段下に使用人を呼び出す>という言い方だから、六条院が主語のようにも思えるが、この音楽会を指揮しているのは太政大臣だから、藤原殿が主語かも知れない。ただ、この文の「声の限り出だして」の主語は「人びと」なので、我ながら強引だが、この「御階に召して」を挿入句の構文と見て<御階にて=正面に呼び出されて>という意味の準成句と読みたい。\*「すぐれたる声の限り出だして」は「出だして」が敬語ではないので<大臣が美声の者ばかり選び出しなさって>という文ではない。この「出だす」は「人びと」が<歌う>だ。と言って、「すぐれたる声の限り」を<最大限上手に(歌う)>と読んでも文意が見えない。「出だして」の「て」は動作順序の接続助詞だが、此处では下に「返り声になる」という変化を導くので、単に列挙の<~してから次に>という経過説明ではなく<そのことを契機として>という事情説明を示している。なので、「声の限り出だして」は<歌を大きく歌い上げると>という言い方と取る。で、「すぐれたる」だが、是は<優れた、見事な>という意味で「声(歌声)」を修辞するのではなく、「返り声になる」為に<選曲された>という意味で「声(歌うこと・発声する事・歌の文句・歌詞)」に掛かっている修辞、かと思う。「返り声」は次項で見ると、何らかの<変化>には違いなく、上文の話題が「いとあはれに昔のことも恋しく思し出でらる」という感傷的な語りだったので、この「変化」は<陰気から陽気へ>という筋が分かり易い。で、この場面は元々が祝賀なのだから、それに相応しい「すぐれたる声」は<陽気な祝い歌>だと考えたい。我ながら強引だが、そう読む。\*「かへりごゑ」は<『集成』は「音楽の調子が、呂旋法より律旋法に変ること。正式な感じから、くだけた感じになる」と注す。>と注にある。実際の変化は私には分からないが、文意としては<陰から陽への変化>なのだろうと前項に見た。ところで、この「返り声」だが、以前にも胡蝶巻一章二段の船樂終焉場面にも語られていた。という、この場面の引き合いは実は、下の「青柳」についてWeb検索してヒットしたものなのだが、四年前の花見の場面でも「返り声」と「青柳」の組み合わせが演出されていたとは、是が丸で春の宴の定番の終焉場面を示しているかの印象だ。となると、「返り声」は「帰声」との洒落言葉で<お開きの合図>ないし<最後の盛り上げ>の場面を当時の読者に告げる書き方、のようにも見えてくる。そう読みたい。しかし、それにしても私にしてみれば、この文は強引に強引を重ねた解釈の末に、然程は重要な意味のあるらしからぬ場面描写の一文を見る思い、という超難文だ。なので、この解釈に自信はないが、今のところはこう読む。

\*夜の更け行くままに(こうして夜が更けて宴も終盤となったので)、物の調べども(曲目も)、なつかしく変はりて(定番の締めになって)、「\*青柳」遊びたまふほど(兵部卿宮が催馬楽の「青柳」を歌いなさる時には)、げに(歌の文句にあるように)、ねぐらの鶯おどろきぬべく(ねぐらの

ウグイスも目を覚ますほど)、いみじくおもしろし(実に愉快です)。\*「夜の更け行くままに」は<時間経過に伴って>という意味ではなく、「返り声になる」という場面の具体描写であり、その情景説明だ。\*「青柳」は<催馬楽「青柳」律の曲。「青柳を 片糸によりて や おけや 鶯の おけや 鶯の 縫ふといふ笠は おけや 梅の花笠や」。>と注にある。下に「ねぐらの鶯おどろきぬべく」とあるので、歌詞の「青柳を片糸によりて鶯の縫ふといふ笠は梅の花笠や」は<柳の若い枝端を啜えた鶯が作る巣は春らしい見事な巣なのだろう>という解釈なのだろう。尤も、「梅に鶯」の花札の鶯は<メジロ>のことだという指摘のサイトが多くあるが、「梅に鶯」の取り合わせが春らしさを表す言い回しなのは今も変わらない。なお、胡蝶巻の船楽終盤でも「青柳」は兵部卿宮が歌ったので、此処でも宮の歌で場が寛いだと見たい。

\*私事のさまにしなしたまひて(この御祝賀は六条院主催の公式行事ではなしに、藤原氏の私的な祝い事ということになさって)、禄など(参列者へ配る記念品などは)、いと警策にまうけられたりけり(驚くほど豪華に用意されていました)。\*この文意は、注に<准太上天皇という身分では規定があるので、私的な内輪の祝賀とすることによって、かえって見事な禄などを準備したという。>と説明がある。従う。が、この文の主語は六条院なのだろうか。左大将は藤原右家筆頭であり、その北の方は六条院の養女という形ではあるが、太政大臣藤原左家筆頭殿の実子だ。つまり、この祝賀は藤原氏総抱えの実相であり、だからこそその豪華さだった、に違いない。文の定式的な主語が源氏殿だとしても、実質の主語は祝賀を取り仕切った太政大臣および左大将の藤原氏、という意味にはなるだろう。つまり、藤原氏の勢力拡大の実態と王家侵食を示す文だ。

#### [第五段 暁に玉鬘帰る]

暁に(夜明け前の暗い内に)、\*尚侍君帰りたまふ(尚侍の君はお帰りになります)。\*御贈り物などありけり(院からお礼の贈り物がありました)。\*「尚侍君帰りたまふ」ということは、左大将と同道して帰宅するのだろうに、左大将に関する記述は無い。表向きの散会の語りは前の文で済んでいる、にしても、であれば尚更、此処に尚侍を語る作者の意図は、源氏殿の内面を、その取り巻く環境の説明と相俟って、立体的に語りたい、というものと受け止める。\*「御」は六条院の言動に付く尊敬の接頭語。

「かう世を捨つるやうにて明かし暮らすほどに(政務を退いて、こう世離れしたように暮らしていると)、年月の行方も知らず顔なるを(時の経つのも気にしないが)、かう数へ知らせたまへるにつけては(このように四十歳になったことをお知らせ頂くと)、心細くなむ(老いたものだと心細くなります)。

時々は老いやまさると見たまひ比べよかし(時々はどうなにか老けたかと思比べに来て下さい)。かく古めかしき身の所狭さに(このような老体の不自由さに)、思ふに従ひて対面なきも(思うように御会いできないのも)、いと口惜しくなむ(とても残念ですから)」

など聞こえたまひて(などと六条院は尚侍に申しなさって)、あはれにもをかしくも(染み染みとも楽しげにも)、思ひ出できこえたまふことなきにしもあらねば(思い出し申すことの無きにしも非ずなので)、なかなかほのかにて(宴会の為に却って少ししかお話しできずに)、かく急ぎ渡りたまふを(尚侍がこのように急ぎお帰りになるのを)、いと飽かず口惜しくぞ思されける(とても物足りなく残念にお思いになったのです)。

尚侍の君も、まことの親をばさるべき契りばかりに思ひきこえたまひて(実の親の太政大臣はそうした血縁とだけ思い申し上げなさって)、ありがたくこまかなりし御心ばへを(有難い細かな六条院の御心遣いを)、年月に添へて(時が経つほど)、かく世に住み果てたまふにつけても(このように院が最上の地位にお就きに成られて満ち足りた生活をなさっていらしても)、おろかならず思ひきこえたまひけり(少しでも恩返しがしたいとの思いを募らせ申しなさっていらっしやったのです)。